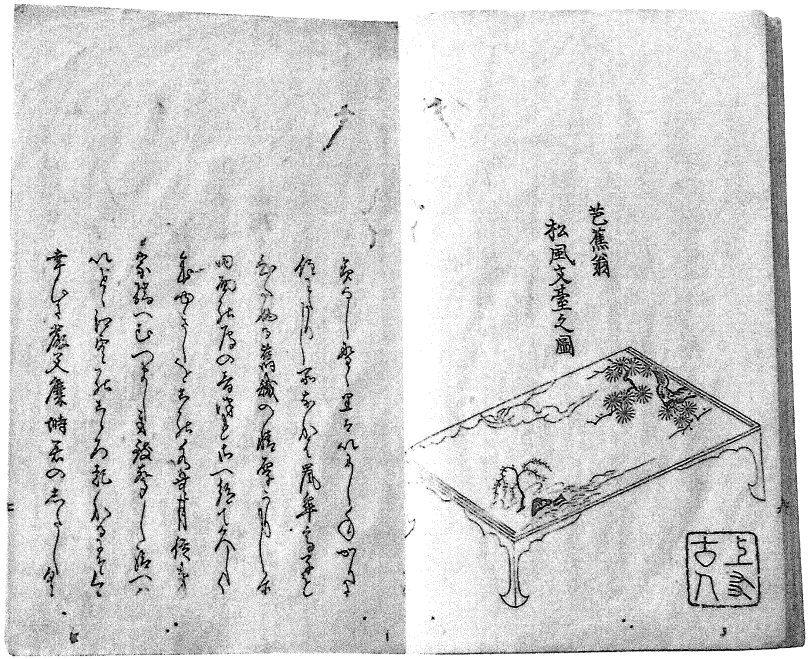
開館一周年記念特別展

芭蕉・旅・甲州

その後の波紋

芭蕉と麋塒が交流したことを、後の時代の人は一生懸命発掘したり、ないしは記念碑を建てたりしました。そういう動向に関わる書籍を、ここに展示してみました。



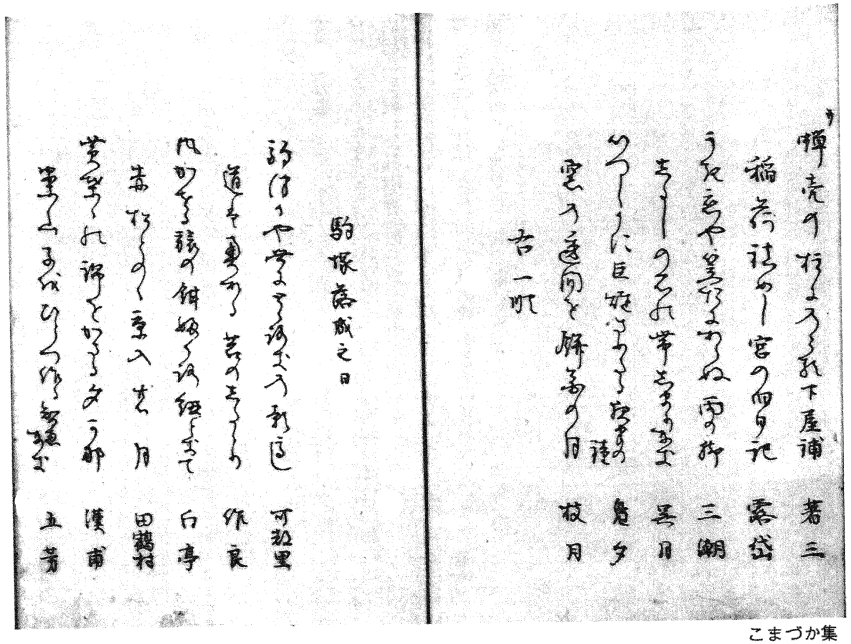
松の宴

『松の宴』（玉川大学図書館蔵『松風之文台』）版本　半紙本一冊

俳諧撰集。宗瑞（そうずい）編。芹沢彦七刊。享保二十年、宗瑞が川越へ旅行した折の記念集。

宗瑞は親友岑水（しんすい）とともに川越へ赴いて、宝永元年に甲州谷村から武州川越へ転封した高山麋塒の子息・嵐皐と会う。そこで、「芭蕉の翁より伝へ置かれし、松風の文づくえ」を一見する。この「松風の文づくえ」の存在は、芭蕉句「松風の落葉か水の音涼し」の句と高山家との関わりを報ずる、数少ない証拠ということになる。芭蕉は麋塒への信頼を表すべく、「松風」の句をつくり、「松風の文づくえ」を贈ったということである。

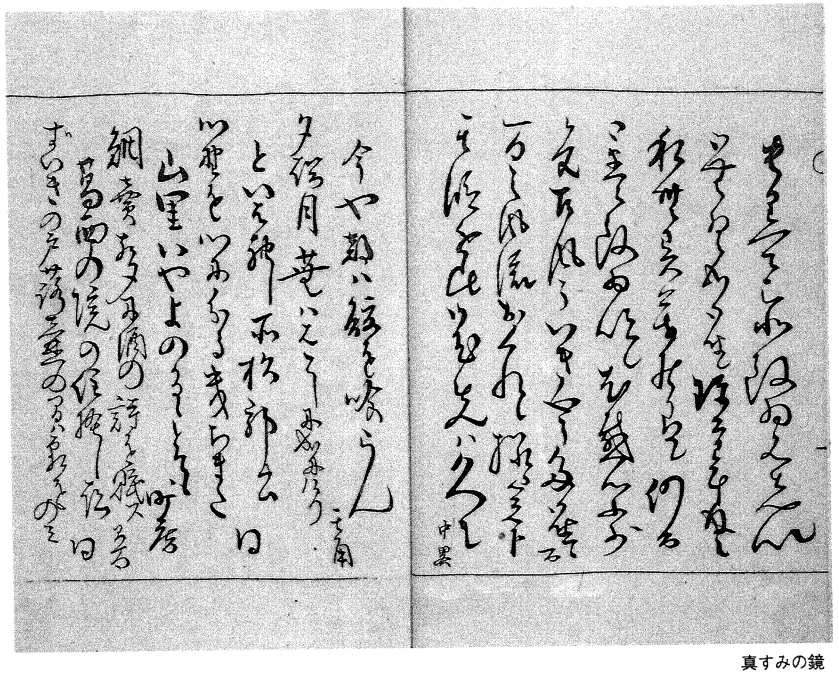
なお、高木蒼梧は本書を、都留市谷村と芭蕉の句「松風の落葉か水の音涼し」とが関係することをうかがわせる書とした（「芭蕉の松風の句と『松の宴』」連歌俳諧研究30）。また楠元六男も『享保期江戸俳諧攷』に紹介。



こまづか集

『こまづか集』（京都大学文学部穎原文庫蔵）版本　半紙本一冊

等々力山万福寺の住職・三車上人が、芭蕉の「行く駒の麦に慰むやどり哉」の句碑を建立した折の記念集。詳細な解説と翻刻に関しては、「資料紹介」の条を参照されたい。



真すみの鏡

『真すみの鏡』（天理大学附属天理図書館・柿衛文庫蔵）　版本　半紙本一冊

上毛の俳人・白亥（はくがい）が安政六（一八五九）年に編集した俳書。編者・白亥は上野国渋川在石原の人で、「石坂」氏また「馬場」氏も称した。名は、知一。他に幻化（花）・此身堂・磊窩等の号も使用。字は「守轍」。志倉西馬門の高弟で、逸淵・西馬両人より俳諧の薫陶をうけた。笠庵鳥吟編『古今墨蹟集』（安政二年）等に「雲水」と紹介される。一年のうち半分を旅にすごした人物であることは、しの木弘明の『俳人　久米逸淵』（群馬出版センター、平10）に言及されている。

この白亥が、すでに館林に移っていた高山家（櫟塘の子孫）を訪問する。高山家が仕える秋元藩は、弘化二（一八四五）年に山形から上州館林に転封しており、それに伴う移転である。白亥が館林に足を踏み入れたのは、折しも十一代藩主・志朝の治世の時期であった。高山家を訪問した白亥は、そこで芭蕉ゆかりの品々を一見して、本『真すみの鏡』に紹介するのである。白亥が紹介した資料を列挙すると、次の通り。

①天和元年五月十五日付、櫟塘宛芭蕉書簡。
②芭蕉筆「本式俳諧之次第」。
③元禄八年六月一日付櫟塘宛書簡。
④「あかくと」の句（絵は省略）。
⑤「あかくと」の句の軸箱裏書。

ともに貴重なものであり、現代の芭蕉研究を支える資料となっている。ただし、この中のいくつかは高山家ではないところから紹介されているので、その後高山家から散逸していったものらしい。その事情については、岡谷繁実が「高山文左衛門ハ白柄組ノ一人ナリ。芭蕉ト友トシ善シ。芭蕉嘗テ、高山ノ家ニ食客ニテ居タリシトキ、粉ハタキ抔ニテ手伝タリ。夫故ニ高山ノ家ノフルイニ、芭蕉ガ発句ヲ書キタルモノヲ伝ヘリ。短冊等ハ数百枚アリ。其他、掛物ノ筥書セシモノアリ。文左衛生門繁実ノ代ニ至リ、悉ク散逸セリ。」（『雑話十二条』『館林叢談』）と報じている。その散逸場所については知る由もないが、少なくとも散逸以前に、白亥の手により数点の資料が紹介されたのは幸いなことであった。

編者・白亥は、明治まで生存していたというが、その没年はわからない。他に、『防人集』（安政五年序）、『木の葉猿』（万延二年序）の編著もある。

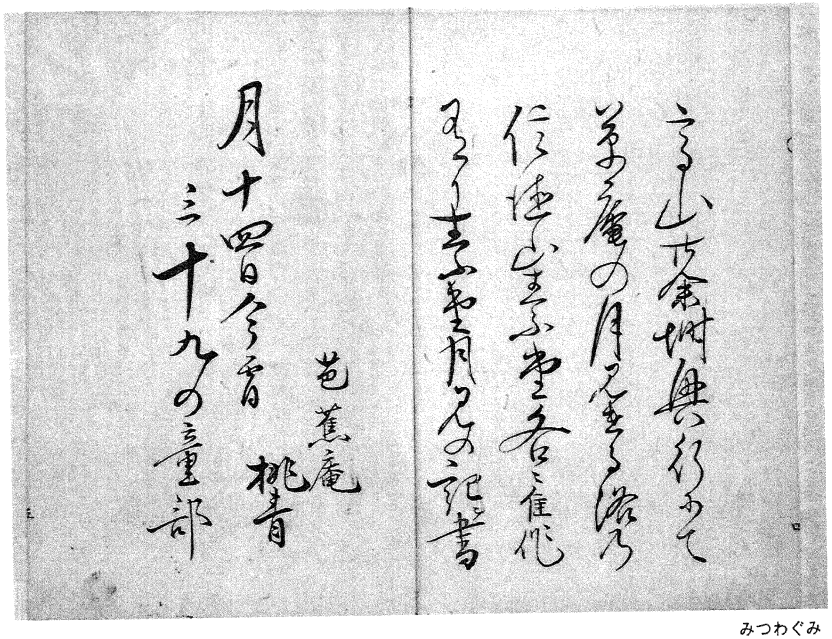
なお、開いてある部分は、天和元年五月十五日付、芭蕉の櫟塘宛書簡の一部である。本文に関しては、付録の「芭蕉と櫟塘」141から142頁を参照。

○座次ハ畫像ノ前後ニ任
○肖像ハ諸風士ノ心匠ニ應
○画工ハ諸風士ノ飯伏ニ隨

氷面鏡九十四人集

『氷面鏡九十四人集』（個人蔵）　版本　半紙本一冊

都留市住の運水が、文化六（一八〇九）年に、芭蕉作と伝えられる「勢ひあり垂氷きえては滝津魚」にちなんで編んだ集。書名は「ひもかがみきゅうじゅうよにんしゅう」と読む。詳細な解説と翻刻については、「資料紹介」の条を参照されたい。



みつわぐみ

『みつわぐみ』（天理大学附属天理図書館蔵）　版本　半紙本一冊

橋石庵一風が、芭蕉の発句「月十四日今宵三十九の童部」にちなんで、天保四（一八三三）年に出版したもの。最初に前書つきの「月十四日」の懐紙を紹介し、その後に白猿・芝耕・文外・扇和・三升・惟草・三斎ら三十七名が、同句に対して自由な解釈・解説を試みる。その内容はきわめて趣味的で、戯文というにふさわしい。他に一人一句の歌仙、さらに発句四十二を所収。

編者・一風については未詳。江戸の人。参加俳人の一人、惟草編『惟草庵新築記念句集』（天保五年）や『俳諧人名録初編』（天保七年）「附録」等に、一風の句を若干確認することができる。

入集者のうち、白猿は七世市川団十郎（当時、海老蔵）。白猿は俳諧をよくし、句集『莚猿狂句集』（天保二年）の編著もある。三升は、白猿の長男の八世市川団十郎。

以上のごとく、梨園の人々をも交え、特殊な趣向に遊んだ一書。